

日本ラカン協会  
第19回大会シンポジウム

## フロイディズムと哲学

日時：2019年12月8日（日） 14:30～18:30

場所：専修大学神田校舎7号館731教室（3F）

〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8

交通：営団地下鉄・神保町駅 徒歩3分

大会参加費：無料

提題者：

原和之（東京大学）

藤本一勇（早稲田大学）

中山徹（一橋大学）

司会：

立木康介（京都大学）

「フロイディズム再考/再興」を年間テーマとして掲げた今年、日本ラカン協会では大会シンポジウムのテーマとして、哲学がフロイディズムに対して、あるいはフロイディズムが哲学に対して持ちえたインパクトを取り上げる。

20世紀フランスにおける精神分析と哲学との関係は、まさにフロイディズムの「再考」と「再興」が問題となったトポスであった。想像的な全体性を志向する限りにおいて「哲学」を峻拒したフロイトだが、その思想のフランス的展開においてはラカンがフロイトへの回帰を標榜しつつその理論化の要所において哲学を繰り返し参照した一方で、哲学者の側でもフロイトとその後継者たちのテキストと思想は注意深い再読と検討の対象となってきた。時に批判的な相互参照のダイナミズムは、同時代そして続く時代の思想的運動の中に織り込まれ、遠く現代のわれわれにまで届いている。本シンポジウムでは、三人の提題者の提題と議論を通して、フロイトを哲学との関わりで「再考」することがその「再興」を支え得たフランスの事例を参照すると同時に、その引き起こした波紋が地理的あるいは時間的な距離を超えて広がってゆくさまをたどることによって、現在において可能なフロイディズムの「再考」と「再興」のかたちを探ってゆく。

\*

「哲学」の複視<sup>ディプロビア</sup>：バディウによる「ラカン」

原和之（東京大学）

精神分析の哲学への関係は、一種の複視<sup>ディプロビア</sup>によって特徴づけられる。これはつまり、精神分析が哲

学に対して二重の輪郭を与えるのを常としてきたということだ。そもそもフロイト自身、体系構築的なものたる限りでの哲学が科学としての精神分析との間に持つ隔たりを強調する一方で、その議論のなかでは哲学者を参照することを決して躊躇わなかった。ラカンはより明示的に哲学の議論に依拠し、その認識論的な方向性を批判しつつもこれをいわば積極的に「読み違<sup>たが</sup>える」ことによって精神分析の理論を構築する。こうして精神分析の側には哲学をとらえる一定の枠づけが存在し、そうして枠づけられた「哲学」との距離こそが精神分析に構成的である、という事態が成立していたわけだが、哲学者の側からはこの事態について、当然別の見方が存在しうる。

本提題では、これを最も明確に言い表したアラン・バディウのラカンについてのセミナーを主たる参照先としつつ、彼による哲学と精神分析の関係の再分節化の作業を振り返り、その現代的な意義を検討する。

### デリダにおける「精神分析的なもの」

藤本一勇（早稲田大学）

デリダの脱構築思想において精神分析が重要であることは昔から指摘されてきたし、デリダ自身、精神分析に関する多くの文章を書いている。大きな哲学者を論じるにしても、一見些細なテキストの細部や文言から出発して（場合によっては「揚げ足取り」と見える仕方）、当の哲学主体が隠し持つ「哲学的欲望」（その普遍的構造が「現前の形而上学」である）を抉り出していく手法は、精神分析のそれに通じるところがあるだろう。

本提題では、そうしたデリダ哲学における「精神分析的なもの」（「精神分析」そのものではなく）のいくつかのモチーフを軸にして、彼の脱構築思想と精神分析との関係を考える。主要なモチーフとして、〈徴候＝症候〉としてのテキスト、事後性（起源・出来事とポスト出来事との関係）、憑在的主体の倫理、等を選択し、デリダにとっての精神分析の「インパクト」を検証してみたい。

### ジジエクと死の欲動——イデオロギー理論から弁証法的唯物論へ

中山徹（一橋大学）

スラヴォイ・ジジエクを中心とするスロヴェニア・ラカン派（他にはM・ドラー、A・ジュパンチッチがいる）は、三つの領域においてその本領を発揮している。第一に、政治理論（例えば、欲望のグラフに基づくイデオロギー理論の構築）。第二に、哲学的省察（精神分析概念を用いたカント、ヘーゲル、マルクス、等々のラディカルな読み直し）。第三に、文化分析（映画や文学をめぐる解釈学への精神分析の導入）である。フロイト的概念はどの領域においてもきわめて重要な役割を果たしている。シンポジウムではそのありようを、ジジエクによる「死の欲動」の再理論化（最終的にそれは彼の「弁証法的唯物論」につながる）に焦点を当てながら考察したい。

以上